

# 神戸わが街

ここがロドスだここで踊ろう

安水稔和

あっという間に12月。今年は松蔭の図書館でお仕事を始めて、この「司書の部屋」では「関西」について毎月書いてきました。一方で、わたし自身の今年を振り返ると、いろんなところへ旅行やおでかけに行ったなあと思います。京都、伊豆、松本、和歌山、愛媛、広島、徳島など…今までになく活動的な1年となりました。観光やイベントを目的としているので、長くて3日、早いと日帰りで帰ってきています。

そして毎回思うのです。「あーやっぱり神戸は落ち着くなあ」と。なぜ神戸がすきなのでしょうか。なぜ人は生まれ育った街を大切に思うのでしょうか。原点に立ち返って、今回は「神戸」についての本を選びました。今回紹介する本は、「神戸わが街 ここがロドスだ ここで踊ろう」です。著者の安水稔和さんは松蔭で英語の先生をされていた方です。詩人としてもご活躍されていて、たくさんの詩集を上梓されています。この本は先生が生まれ育った「わが街」神戸の風景を書き記した詩・エッセイを集めたものです。読んでいて、とても楽しかったです。知っている風景や感じたことのある思いが、ぴったりの言葉にあてはめられるのはとても快感です。たとえば、旅から帰ってきたときのこと。

私はよく旅に出る。旅から帰ってきて電車の窓から六甲山の南斜面の家々の灯を眼にするとき、旅の終わりを感ずる。新幹線で帰ると、トンネルを抜けて新神戸駅のホームから街の灯をちらと見たとき。飛行機で帰ってきたときは、空港からのリムジンバスの窓から六甲の山かげと広がる街の灯を眼にしたとき。ああ、私の町に帰ってきた、と思う。旅から帰ってくるときはたいてい夜になっています。1000万ドルの夜景とも言われる神戸の夜景。あかりのひとつひとつは、それぞれのお家だったり会社だったり商業施設だったりいろいろです。そこには人がいるんだなと思うと、全体の美しさに感動しつつ、ほっと一安心します。ここが自分の住んでいるところなのだ、と思い出します。他には、神戸のイメージについて考えたとき。神戸はどんな街ですかとか、神戸人の特徴はとか、そういう設問にはそれなりに答えることはできるのだが、よく言われる神戸らしさは実は一面的なひとつの顔、ひとつの神戸ではないか。ひとつの神戸があるのではなく、いくつもの神戸があるのであって、ひとつのではなくて、いくつもの にこそ神戸の未来の可能性があるのではないか。不況・貧困・差別、水害・戦災・震災、なくなるといわれる連鎖にもかかわらずわが街神戸が絶えることなく生の鼓動を続けるのは、いくつもの神戸 だからである。神戸は景色がきれいとか、おしゃね、グルメなどいろんなイメージを持たれる街だと思います。みなさんは実際に住んでみて、学校に通ってみて、どんなイメージがありますか？当たり前すぎて改めて考えてみることは少ないかもしれませんね。私は神戸の街のいいところは、いろいろなものが程よく詰まっているところだと思っています。山と海、その間には街があり、繁華街があるかと思えば、昔ながらの商店街もあります。各区の個性もあるし、少し足を伸ばせば大阪京都、岡山や四国にも行くことができます。気候も良く、ちょうどよい加減の住みやすさ。カルチャー面でも充実しています。「神戸のB面」とも呼ばれる新開地には寄席ができたし、動物園、水族館、美術館、博物館、植物園、図書館、映画館、野球場、サッカースタジアム、百貨店、空港、新幹線、神社、お寺、温泉、コンサート会場、ライブハウス、プラネタリウム、旧居留地、異人館、私鉄を含む電車の数々…ほどよく散らばっていてお散歩するのにちょうどよい距離。現在の神戸の街並みを思い浮かべたら、たくさんのお気に入りの場所が出てきます。そんないろいろが集まっている神戸。そこにいる神戸の人、旅行や仕事で訪れた人、外国の人…いろんな人がいることもこの街には欠かせない要素だと思います。ここから行くにしろ、ここから戻るにしろ、ここにとどまるにしろ、とにかくここへ来ている者が神戸人だと私はおもっている。人が来る、といえば12/7からルミナリエが始まりました。神戸ルミナリエは1995年1月17日に起きた阪神・淡路大震災の記憶を次の世代に語り継ぐ、神戸のまちと市民の夢と希望を象徴する行事です。24回目となる今年のテーマは、「Luci di felicità (共に創ろう、新しい幸せの光を)」。まだ生まれていなかった皆さんにとって、震災当時がどのような状況だったか想像するのは難しいかもしれません。この本には「阪神大震災 そして新しい出発」という章があります。読んで、想像してみてくださいほしいなと思います。最後に、安水先生が「ちとせのたより」に寄せた文章も載っています。松蔭生について書いてあるので、読んでみてくださいね。